

1995年 8・15にあたって

敗戦五十年目の決意

日本戦没学生記念会(わだつみ会)

戦没者への追悼や反省の言葉はあっても、謝罪も補償の約束も不戦の誓いも無い「戦後50年国会決議」が、議員の半数にも満たぬ賛成で衆議院を通った。採択に至る手続きも論外だが、内容にいたっては、「歴史を教訓に平和への決意を新たにする決議」という表題を骨抜きにするレトリックでしかない。近隣諸国はもちろん、世界中から批判を浴びたのは当然のことだが、他方、独善的な歴史観と稀にみる無責任性を露わにしたこのような国家意思に、戦後50年にわたるわれわれ日本人の社会変革＝自己変革の努力の不足が反映している事実をも見落とすわけにはいかない。

多くの市民団体 平和団体 宗教団体や、いくつかの地方議会が、戦中にまでさかのぼって過去の誤りを率直に認め、次代のために真の平和を築く決意を改めて表明しているのは、「このことの深く「遠い責任」を自覚するからにはかなるまい。」「再び戦争の悲劇を繰り返さないため、戦没学生を記念することを契機とし、戦争を体験した世代とその体験をもたない世代の交流、協力をとおして戦争責任を問い続け、平和に寄与することを目的」として活動してきたわだつみ会もまた、同じ流れに立って、基本的な考え方を明らかにしたい。

第一に、心すべきは現在の立場から過去の正当化や合理化をしてはならないことである。国会決議が「大東亜戦争史観」と妥協した、あいまいな戦争観しか打ち出せなかったのは、日本の社会全体が結局はあの戦争の受益者だったことを物語っている。すなわち、戦後の冷戦構造によって指導層が延命し、賠償も脱植民地化のラストも負担せずにするだけばかりか、朝鮮戦争やベトナム戦争の特需などを通じて高度成長の道を驍進して経済大国の地歩を占め、今や、PKO派兵以来の軍事大国・常任理事国入りなど政治大国の役割まで手に入れようとしているこの国にとってあの戦争はいささかも反省すべきものとなっていない。これに対し、われわれは、明治以後のすべての戦争と同じく、あの戦争の性格が、近隣諸国を支配し植民地化し、日本の勢力圏を拡張するための侵略戦争だったとの認識から出発する。

に抱く痛切な想いを国家が吸収するため、余りにも安易に「戦没者は平和の礎」といつ言葉が用いられる。だが、無残な死を強いられたあの無数の戦没者がこの「虚構の平和」の礎であるとするなら、真の平和を地上にもたらすために、人類はあと何億人の死者を必要とするところであろう。それぞれかけがえないものではあるが、個人の体験が、いや国民の経験の総和でさえも、歴史なのではない。他者の体験他国民の経験に想像力をめぐらし、それを含めた事実と向き合うことで、「戦後」はピリオドを打ち、近隣諸国とその民衆との和解と友好を手にする唯一の道であろう。

第五に、これまでわだつみ会は、日本人戦没学生や日本人学徒兵の遺念を出発点に活動を行ってきたが、他方で、「学徒出陣」直後、「志願」の形で事実上「徴兵」された朝鮮人、台湾人、学徒兵の問題を見落としてきた。彼らの苦しみはもとより、その名簿や生死さえ明らかになっていないのが現状である。韓国、台湾の同志と協力して、調査や事実の発掘につとめ、歴史の落丁に光を当てたい。

戦闘員はもとより、無数の非戦闘員が倒れた世界戦争の世紀が終わろうとしているこの瞬間にも、ボスニアで、チエチエンその他の地で流血が流れている。この時にあたり、わだつみ会は、紆余曲折を経ながら活動をつづけてきた先人たちの営為を引き継ぎ、「不戦の誓い」を今一度新たにするとともに、志を同じくする人々と手を結び、特に右のような点を強調しつつ、21世紀に生きる若い人々へ思想的な連帯の輪をつないでいきたいと願う。とりわけ本年は、『ぎけわだつみのこえ』(第1集)の改定作業を進めるとともに、平和の遺産を形あるものとして次代に残す教育と発信の場 「わだつみ記念館」建設の具体化に力をつくす所存である。

戦時中すでに拳がっていた、次のような悲痛な声を受け継ぎながら

「俺の子供はもう軍人にはしない、軍人にだけは……。平和だ、平和の世界が一番だ。」

「日本人の死は日本人だけが悲しむ。外国人の死は外国人のみが悲しむ。どうしてこうでなければならぬのであろうか。なぜ人間は人間で共に悲しみ喜ぶようにならないのか。」

1995年 8月 15日

日本戦没学生記念会(わだつみ会)